
抱える困り、また支援の方法について、社会に発信していくことも目的の一つである。

帰国渡日児童生徒つながる会

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

このプロジェクトの名称は「帰国渡日児童生徒つながる会」である。現在京都府内の学校には、国際結婚の家庭に生まれた子どもや、在日外国人、帰国児童生徒などさまざまな形で「外国につながる子どもたち」が点在している。彼らは言葉や文化が違うということから、日本人の子どもたちとコミュニケーションをとったり日本式の学校になじんだりすることが上手いかず、孤立してしまうことも少なくない。また、周りに同じ悩みを共有したり相談したりできる相手がおらず、一人で抱え込んでしまうこともある。

こうした背景から本活動では、京都府内の学校に通う帰国渡日児童生徒に対して学習支援を行うとともに、同じようなバックグラウンドを持つ子ども同士が交流する場を設けることを目的としている。そのことを通して、参加児童生徒同士が悩みを共有したり励ましあったりできるような人間関係を築き、それぞれが自身の持つかけがえのない個性に気づき、誇りを持てるようになってほしいと考えて活動している。

また、私たちが教員を目指すにあたり、このような児童生徒の存在について知ることや、帰国渡日児童生徒ならではの理解困難な点を知り、指導方法を検討することは重要であり、将来に活かすことができる貴重な経験になると考える。よって、つながる会での参加児童生徒との継続的な関わりの中で、私たちが参加児童生徒の話をよく聞き、彼らの言語面・精神面での成長を細かく捉え、学校現場や外部での援助について考えていくことも目的としている。

さらに、そうした子どもたちの存在と彼らが

2. 代表者および構成員

・代表者

鳴橋杏里 国語領域専攻 3回生

・構成員

山下真衣香 幼児教育専攻 4回生

坂本有里紗 国語領域専攻 4回生

村上舞 国語領域専攻 4回生

岸田茉莉子 国語領域専攻 3回生

渡辺優 国語領域専攻 3回生

石井千晴 教育学専攻 3回生

鈴木タリネミツエ 理科領域専攻 3回生

榎木蘭直子 音楽領域専攻 3回生

北出萌香 国語領域専攻 2回生

柴本愛美 国語領域専攻 2回生

青木小百合 国語領域専攻 1回生

3. 助言教員

浜田麻里先生（国文学科）

第2章 内容や実施経過など

1. 実施経過

6月 夏の活動企画準備

たけのこ会参加

7月 夏の活動企画準備

第39回全国在日外国人教育研究集会京都大会（以下：全外教京都大会）原稿作成・発表準備

たけのこ会参加

8月 全外教京都大会参加

夏の活動実施

たけのこ会参加

10月 京都ヒューマンフェスタ 2018 展示準備

冬の活動企画準備

11月 京都ヒューマンフェスタ 2018 展示準備

KYOKYOSDGs フォーラム 2018 発表準備

冬の活動企画準備

京都ヒューマンフェスタ 2018 参加

KYOKYOSDGs フォーラム 2018 参加

12 月 内閣府より「チャイルド・ユースサポート章」受章
冬の活動実施

2. 実施内容

(1) 全外教京都大会

場所：同志社大学新町キャンパス

日時：8月4日・5日

内容：大会では4つの分科会があり、その中の1つ「未来をひらく」にて、外国につながる子どもたちへの教育に携わる1団体として1時間ほどの発表を行った。発表に際して、前日には他の発表者や司会の方との打ち合わせを行った。また、8月3日に交流会を行った外国にルーツをもつ子どもたちによる発表や同じ分科会の他の発表を聞き、外国にルーツをもつ人々と彼らを取り巻く環境・問題についての理解を深めた。

(2) 夏の活動

<1日目>

場所：京都教育大学

日時：8月9日

内容：午前中は学習会、午後はレクリエーションの時間として活動した。学習会では、学生1人につき子ども1~2人ほどをみて、子どもたちそれぞれの学校で出された夏休みの宿題のサポートをした。お昼には食堂へ行き、会話をしながら一緒に食事を楽しんだ。レクリエーションでは、屋外でしば取りゲーム、屋内で「声を頼りに」、新聞紙ジャンケン、新聞紙タワー、ペットボトル輪投げ、ジェスチャーゲーム、紙トンボの工作を行った。

<2日目>

場所：友愛の丘・木津川運動公園

日時：8月10日

内容：京都教育大学に集合し、貸し切りバスで友愛の丘へ向かった。バスの中では緊張をほぐすために風船爆弾ゲームとBINGOを行った。友愛の丘では子どもたちをグループ分けし、グループごとに役割を与えてミニホットドッグとそうめんを作った。そ

うめんは流しそうめんにして楽しみながら食べた。片付けもスタッフと子どもたちが一緒になって行った。午後には木津川運動公園に移動し、全員でドッジボールをした。

(3) 京都ヒューマンフェスタ 2018

場所：京都テルサ

日時：11月18日

内容：事前にポスターを作成し、会場内のブースにてポスター展示をした。ブースには常駐し、ブースに来ていただいた方への説明や対応も行った。また、他のブース展示やステージでの発表・講演を見て人権問題に対する理解を深めた。

(4) KYOKYOSDGs フォーラム 2018

場所：京都教育大学

日時：11月28日

内容：SDGsの達成に携わる活動をする団体として8分ほどの発表を行った。また、他の発表や講演を聞き、SDGsに対する理解を深めた。

(5) 冬の活動

場所：京都教育大学

日時：12月26日

内容：午前中は学習会、午後はルーツに関する交流会とレクリエーションの時間として活動した。学習会では、学生1人につき子ども1~2人ほどをみて、子どもたちそれぞれの学校で出された冬休みの宿題のサポートをした。お昼には食堂へ行き、会話をしながら一緒に食事を楽しんだ。ルーツに関する交流会では、まずルーツを持つスタッフ2人と司会1人で「日本に来たきっかけ」「これまでや今の学校生活で楽しかったこと・つらかったこと」「家ででの生活」の3つのテーマについてパネルディスカッションを行い、子どもたちにはその話を聞いてもらった。その後、グループごとに自分のルーツについて話す時間を1時間ほど設けた。グループにいるスタッフが話を回していくようにサポートし、「日本に来た／日本にいるきっかけ」「日本にいて困ること」「自分が外国とつながりを持ってよかった・嫌だったと思うこと」などについて問いかけた。レクリエーション

では、屋内で障害物リレー、風船パタパタゲームなどを行った。

(6) たけのこ会

場所：京都市地域・多文化交流ネットワークサロン

日時：毎月第2日曜 14：00～17：00

内容：たけのこ会は、京都市教育委員会の広報のご協力のもと、京都パグアサフィリピンコミュニティ、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンと共同運営している学習会である。対象は主にフィリピンにルーツを持つ小中高生で、パグアサの方たちが子どもたち一人一人に声をかけて集めてくださっている。フィリピン以外のルーツの子どもが参加することもあるが、今年度はフィリピンルーツの小学生4人が継続的に参加してくれた。学生を含むスタッフが個別につき、休憩をはさみつつ16時ごろまでは子どもたちが持ってきた宿題をみたり、こちらで教材を用意して教えたりした。さらに今年は子どもたちの需要に応え、英語教室も行った。勉強をした後は公園で遊んだりお菓子を食べながら話したりと子どもたちとのコミュニケーションを図っている。

第3章 結果や成果など

1. 活動について

(1) 全外教京都大会

これまでも一般の方に対して発信する機会は何度かいただいていたが、外国ルーツの子どもたちを取り巻く問題を専門にされている研究者や教育現場の先生方相手に実践報告をする機会は初めてだったため、非常に意義のあることだったと思う。先生方の実践例と並べて報告させていただいたこと自体が認められているということであり、必要性を感じられているということが確認できた。

また、他の先生方の発表を聞く中で、実際の学校現場ではどのような支援が行われているのかを学ぶことができた。一方で、各地でまだまだ学校現場での支援体制が整っておらず、先生個人の頑張りでの支援を続けておられるような状態が多くあることが分かり、改めて学校外での支援の場の重要性を感じた。

(2) 夏の活動

野外活動をともにすることで、日本語が話せるか話せないかに関わらず子どもたち同士が仲良く打ち解けていた様子が見られた。また、日本語をまだ上手く話すことができない子に対して、同じルーツをもつ子が母語でレクリエーションのルール説明の補足をする姿が見られるなど、子どもたち同士の交流を促すことができた。

また今回から、昨年度まで活動に参加してくれていた高校生の子がスタッフとして参加してくれた。長期休みの活動は中学生対象のためスタッフという形で来てもらうことになったのだが、形は変われどこの活動に関わり続けたいという気持ちを持ってきていることが分かった。間違いなくその子にとっての居場所の一つとなることができていたのだと感じた。

(3) 京都ヒューマンフェスタ 2018

一般の方は主にステージを見ることが目的のようであったが、日頃外国ルーツの子どもたちについて語りかけることのできないような人にもポスターを見ていただいたり、外国ルーツの子どもたちの存在やその困りについて知っていただけたりしたと思う。また、私たちも外国ルーツの子どもたちを取り巻く問題以外の人権問題について知ることができた。

(4) KYOKYOSDGs フォーラム 2018

教員を目指す人が多くを占める本学の学生に対して、外国ルーツの子どもたちについて発信できたことは有意義であったと思う。また発表するにあたって、SDGs という世界中が達成を目指す目標の枠組みの中で、自分たちの活動がどういった位置づけにあるのか、どういう意義をもつのかということを確認することができた。

(5) 冬の活動

今までの長期休みの活動と大きく異なる点が、ルーツに関する交流の時間を設けたことである。初めての試みのため改善すべき点はたくさんあったが、自分のルーツについて見なおす良いきっかけを提供することができたのではないかと思う。これまで活

動のふとした会話の中でお互いのルーツのことについて少し話しているような子もいたが、ほとんどが自分からルーツについて話しているところは見たことがなかった。そういった子どもたちからも、生まれの国のことやどういう経緯で日本にいるのかということとその子の口から聞くことができたのは良かったと思う。子どもたちにとって話す機会をつくることができたということがまずこの取り組みの第一歩であっただろう。また、「自分のルーツ」と言われてもピンときていなかったり自分からは話さなかったりする子もいたが、他の人の話を聞いているだけでも刺激になったと考えられる。

外国にルーツをもつ子どもたちが集まっているという環境をいかして、ただ勉強したり遊んだりするだけではなく、こういったルーツに関するイベントをこれからも取り入れていきたいと思った。

(6) たけのこ会

参加人数もそれほど多くなく1対1対応をしているため、きめ細やかな支援をすることができた。継続的に参加している子どものうち、長い子は3年ほど続けて来ている。スタッフが来るのを心待ちにしているなど、この活動が居場所となり得ていると言える。

今年度から始めた取り組みとしては、母語学習支援のための英語教室がある。母語学習をすることで、学校では日本語を話すため日本語の方が話しやすい子どもと、母語の方が得意で日本語は苦手な保護者との間の会話を円滑にすることができる。親子のコミュニケーションが上手くいかないことは子どもにとっても保護者にとってもストレスであり、大きな悩みとなりうる。英語教室の設定により、このような外国ルーツの子やその家庭ならではの問題を解消するための一歩を踏み出すことができたと言える。また、ある程度成長した子どもにとっては、昔話することができていた言葉を話せなくなるということに悔しさや悲しさを感じ、言葉を取り戻したいと思うこともある。たけのこ会に来ている子どもたちにはそういった子が多く、子どもたちの需要に応えるという目的も果たしていた。

また、机や部屋でスペースを区切るなど学習環境

にも気を遣ったことで、より子どもたちが集中して学習に取り組む様子が見られた。

2. チャイルド・ユースサポート章について

内閣府では、子供・若者を育成支援する活動、子育てと子育てを担う家族を支援する活動を行っている団体や個人に参考にしてもらうことを目的として事例を紹介する事業を行っており、その事例として選ばれた団体や個人に「チャイルド・ユースサポート章」を贈っている。本団体は平成30年度の子供・若者を育成支援する活動10件の中の一つとして選ばれた。

12月11日に大学内で京都市役所の方に表章していただいた。受章については京都新聞の記事として取り上げていただいた。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. 反省

(1) 全外教京都大会

全外教は研究集会ということで、それぞれの実践例を詳しく報告されているという印象を受けた。私たちの発表では細かいエピソードをいくつか話したが、もっと1人について長く見たり深く関わることができると良いと思った。学校現場と学校外の活動では関わる時間がかなり違うため、その濃さもおのずと違ってくるのだろうが、関わっている間はもっと細かに子どもの様子を観察する意識をもっておくことが大切だと思い知らされた。

(2) 夏の活動・冬の活動

夏の活動において、特に野外活動などは、いわゆる「普通」の子どもたち向けの体験教室などとの差異が感じられないという大きな反省点があった。その反省点は冬の活動にて改善することができたが、これからも引き続き自分たちの活動ならではの取り組みについて考えていきたいと思う。

(3) たけのこ会

昨年度は一旦参加者が増え始めていたが、今年度に入ってまた参加者が減ってきてしまった。参加できないことが必ずしも良くないことではない上、今

は個別対応を上手くやっけていけるため、やみくもに子どもを増やそうとすることは良いとは言えないが、一度参加してくれて支援が必要だと思われた子どもたちに来続けてもらうための手立ては考えるべきかもしれないと感じた。

2. 今後の展望

本団体の活動は今年度で 12 年目となる。長く続け活動を活発化させてきたことにより、昨年度から京都市や府、さらには内閣府に認められるようになった。活動が評価されたことに対する喜びを感じたとともに、まだまだ需要のある、むしろこれから注目されていく活動であると意識させられることになった。支援を必要とする子どもたちのため、この活動をこれからも絶やさず続けていきたいと思う。一方で学生スタッフの数が少なくなっているため、運営方法の見直し等も行っていきたい。

長期休みの活動において今年度あらたに始めたルーツに関する取り組みは、これからも検討しながら取り入れていきたいと思う。そうした活動の中で実際の子どもたちと接する一方で、年々いただけるようになってきた多様な発信の機会を活かし、その中で自分たちの活動の意義やあり方を絶えず見直し続けていきたい。